

氏 名	渡 辺 悟 わた なべ さとる
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第732号
学位授与の日付	昭和53年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	滴状類乾癬の電子顕微鏡的研究

論文調査委員 (主査) 教授 西 占 貢 教授 安平公夫 教授 太藤重夫

論 文 内 容 の 要 旨

滴状類乾癬は炎症性角化症に属する疾患で、臨床的には掻痒のない新旧を混じえた皮疹よりなり、慢性に経過して数年におよぶ。副腎皮質ホルモン剤の内服あるいは外用が奏効しないこと、紫外線照射がある程度有効であることから、光顕組織的には湿疹に類似（表皮下層の細胞間浮腫、単核球遊走、真皮上層の血管周囲性単核球浸潤）するものの、湿疹・皮膚炎群の疾患とは異った反応パターンを示すものとして、その発症病理に興味がもたれてきた。しかしながら、現在までその報告はごく限られ、蛍光抗体法、光顕組織化学あるいはオートラジオグラフィの所見から、主たる反応の場が表皮であること、真皮小血管の侵襲はほとんどみられないことが明らかであるにすぎない。そこで私は、4症例において、本症のごく早期の表皮病変部を、現在の routine procedure であるオスミウム固定、エポン包埋、ウラニル鉛染色によって電子顕微鏡的に詳細に観察し、皮疹発生時におけるウィルスの存在の可能性、および表皮細胞の微細構造的変化とそれの湿疹との相違などについて検討を加えた。

1) ウィルス小体を見出すことは出来なかったが、近年、エリテマトーデスにはじまって、皮膚科領域を含めて、膠原病、悪性腫瘍、ウィルス感染症などで、主として血管内皮細胞に見出されてきた tubuloreticular structure（ウィルス様管状構造）を、微細構造的変化を伴った表皮細胞の中に、とくに小胞体と関連してしばしば見出した。（現在まで表皮細胞に見出されたのはエリテマトーデスにおいてのみ）。

2) 表皮細胞は、湿疹におけるより、より強の変性所見を示した。即ち、表皮細胞質全体がトノフィラメントで満たされた、高度に変性がすすんだと思われる表皮細胞をとところどころに観察した。（この所見は一次性刺激性皮膚炎などで記載されてきた）。その他に、dense body と myelin 様構造の出現、小胞体の開大、糸粒体の変化、細胞膜の細胞質内への陥入、細胞質の一部がリボゾーム様顆粒を含んで隣接するランゲルハンス細胞に向って突出する所見、表皮細胞質内にデスモゾーム様構造および gap junction 構造がみられ、更にデスモゾーム様構造に gap junction 様構造が連絡するという、これまでに記載のない所見も得られた。なお、表皮への遊走細胞は主として単球であり、リンパ球は少数であった。

本症の早期表皮病変部において、tubuloreticular structure が、小胞体に関連し、周辺にライソゾーム

を伴ってしばしば観察されたこと、および本構造が他臓器においても、新しい病変部によりしばしば出現し、最近では細胞損傷における早期の反応形態を表現しているものとの解釈があること、更に表皮細胞の糸粒体の変化、線維性凝集塊、主として単球の表皮内遊走と線維性凝集塊の貪食といった所見より、本症の発生病理においては、表皮の一次的傷害が重要な役割を果しているものと結論した。

論文審査の結果の要旨

滴状類乾癬は慢性に経過する本態体全く不明の疾患であるが、本研究はこの疾患の4症例について、早期表皮病変部を電子顕微鏡により詳細に観察し、本症の発生病理につき超微形態面より解明を試みたものである。この研究により早期皮疹の表皮細胞の中に、近年エリテマトーデス等の膠原病の血管内皮細胞にみられている tubuloreticular structure (ウィルス様管状構造)が、とくに小胞体と関連して存在する事が判明した。このウィルス様管状構造は細胞損傷における早期の反応形態を表現するものと考えられているが、これが本症の新しい病変部に出現している事と、更に、高度に変性の進んだ表皮細胞、線維素凝集塊、ミエリン様構造、細胞質内にデスモゾームおよび gap junction がみられる事、単球の表皮内遊走などの所見から、本症の発生病理においては表皮の一次的障害が重要な役割を果している事が明らかになった。

以上の研究は本態不明のこの疾患の解明に一つの手掛を見出したものであり、従って、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。